

Title	エンゲルスの口オドベルトス批評 (二、完)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.11 (1922. 11) ,p.1563(63)- 1569(69)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221101-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たゞ前述の定義から推すと職業並に所有の區別は階級別の標準とはならない。また經濟的過程の内部において種々な相互關係による地主を有してゐる労働者の團體また特殊な所有を取つて見ても、それは階級を構成しない。煙草製造労働者も纖維工業労働者も同じ經濟的條件の下に、賃銀に對してその労働を賣り、同じ方法(同じ程度ではないにしても)で餘剩労働を施行する。企業者團(產業的、商業的並に金融的資本主義)土地所有者に對する彼等の生産的行動から起る階級的地位は同一である。彼等は、これによると同一の利益と對抗とを持つてゐる。

資本家に就いてもこれは同様である。彼が鑛山、炭坑、煉瓦、煙草製造にその資本を放下してゐても資本家たる地位に就いては同一である。然るに工業家、商品を賣買する商人、貨幣並に兩換によつて生活してゐる銀行家は同一の

うに資産の大小、所得の大小もまた用をなさない。人はよく云ふ。ある農民または手工業者の収入並に生活關係はよい地位の工業労働者よりも高くはない。故に彼等は労働者階級に屬すべきものである。また云ふ。小商人の營業の何ものも彼に屬してゐない。彼は負債を負つて働いてゐるに過ぎない。だから彼もまた労働者である。マルクス主義の階級學説はかくの如きことを主張しないのである。かくの如き主張は財産の大小と所得の高低を以て階級別の標準とした舊學説への復歸に別ならない。獨立の農民は高給の労働者以下の収入を有するが故に賃銀労働者ではない。彼は資本家に對して何等の賃銀關係を結んでゐない。餘剩労働も利潤をも生産してゐないのである。これと同様に落魄した貴族または官吏は彼の収入が通常の労働者の収入以下に下るからと云つて決して賃銀労働者で

資本家ではあるが、資本制的經營の内部においては、種々の經濟的機能並に相互關係に基づく異つた地位を持つてゐる。故に資本家階級中の下位の階級として工業家、商業家、金融家を區別することは正しい。工業家は他人の労働力を購入して、ある商品の生産のための經營にこれを利用して、さうして生産された餘剩價值の中から企業利潤としての彼の配分を取得する。金融家は利子を得てこれに對して資金を融通する。この兩者共資本家であつて、社會的生產過程において生産された餘剩價值からその所得を得る。乍然、この過程における彼等の經濟的機能は異なる種類のもので、資本制的經濟の内部において異なる活動方面を有してゐる。故に彼等の間には利害の不一致が時としてあり得るのである。

階級區別の標準として職業が用をなさないやはないのである。要するにマルクス主義においては職業別財産の差異、所得の高低を以て階級別の標準とはしない。マルキシズムに従へば階級は經濟的發達の過程における産物で、當時の經濟組織から發生する共同利害の所産である。然らば、階級は如何にして發達したか。これが次の問題である。(Cunow, A. a. O. Ss. 1156)

(未完)

エンゲルスのロオドベル

トス批評 (二完)

小泉 信三

ロオドベルトスは謂ふ、

第二の條件に就て云ふと、券面に證明せられてゐる價值が實際に交易上に存在するやうにす

る爲めには斯う云ふ仕組を設ける。即ち實際に一生産物を交附した者のみが其生産物を造る爲めに費やした労働量を精確に記入してある紙券を受取るやうにする。二日の労働の生産物を交附したものは「一日」と記入してある紙券を受取るのである。發券に當つて此規則を厳守することに依て、必然此の第二の條件も満たされなければならぬのである。蓋し吾々の前提に従へば、財の實際の價值は常に其製作に費された労働量と一致し、而して此労働量は普通の時間單位を其尺度とするものであるから、苟も二日の労働のそれに投せられてある一生産物を交附した者が、二日の證明券を受取るならば、彼れは正に己れが給付した丈のそれ以上でも以下でもない價值を收得する譯であるし、又實際に一生産物を交易に提供した者のみが斯る證明券を受領するのであるから、券面に記入せられた丈の

價值が社會の需要滿足の爲めに存在することも亦確實である。此規則を厳守すれば、現存の價值額と、證明せられたる價值額とは正確に一致する。然るに證明せられた價值額は正に指定せられた價值額と同一であるから後者は必然現存價值と一致し、一切の要求は充足せられ、決済は正しく行はれざるを得ないのであると。

ロオドベルトスは今迄何時も其新發見に於て立ち遅れの不幸に逢つて來たが、今度こそは少くも一種の獨創と云ふ、功績を擧げ得たのである。彼れと同じく労働貨幣のユウトピヤを説く競争者の中にもそれを此のやうな單純幼稚な云はゞポメラニヤ的形式を以て説くことを敢てした者は誰れもないのである。元來今日の資本的社會に於ては、工業資本家は皆自己の判斷に従つて、其の欲する物を欲する方法、欲する數量に於て生産する。社會の需要は彼れに取つては未

知量である。それにも拘らず結局何うにか需要が満たされて、大體に於て生産が需要ある物に向けられると云ふのは何うして行はれるのかと云へば、それは競争に依て行はれるのである。即ち種類若しくは數量の上で時の社會的需要に超過して生産せられた商品は、失價して労働價值以下に下るといふことに依て、間接に生産者をして、無用なる若しくは必要以上なる商品の生産せられた事を感じせしめるのである。そこでこれから二つの結論が生ずる。

第一は商品價格が絶えず商品價值から離反するといふことは、商品價值を實現せしむるための必要欠く可からざる條件である。と云ふことである。競争並に之と共に商品價格の動搖と云ふことに依てのみ商品生産の價值法則は貫徹される、社會的必要労働時間に依ての價值の決定が現實の事實となるのである。尤も其場合に價

値の表現形態たる價格は價值とは其稍々異がつた外觀を呈することにはなるが、これは獨り價值に限つたことではなくて、大多數の社會的關係の免れ難き運命である。其處で今ロオドベルトスのやうに、互に交換に行ふ商品生産者の社會に於て、労働時間に由る價值決定を、競争を廢することに依て、實現しようとするのは例に由て例の如き經濟法則の無視を證明するもの以外ならぬ。労働時間に由る價值決定の實現といふことは、競争の價格壓迫といふことより外に之を行ふ方法はないのである。

第二に競争は相互間に交換を行ふ商品生産者の社會に於て價值法則を實現せしむるところの競争は、また一に其事に依て社會的生產の秩序と組織とを可能ならしめるのである。生産物の失價若しくは増價に依てのみ商品生産者は社會が何を幾許要し、若しくは要せざるかを覺らす

にはあられなくされるのである。然るにロオドベルトス等の主張するユウトビヤは正に此の唯一の調節者を撤廃しようとする。これを撤廃して何うして各生産物が必要量だけ生産せられ、又必要量以上には生産せられないといふ保障が與へられるか、吾々が穀物と肉との欠乏に苦しんでゐる一方に砂糖と馬鈴薯酒とが有り餘つて困つたり、洋袴の数が足りないのに洋袴のボタンが幾百萬となく生産せられたりすることが何うして起らぬと保障されるかと問へば、ロオドベルトスは意氣揚々として其結構なる計算書を吾々に示す。それに由れば過剰なる砂糖の各封度、賣れぬ薯酒の各瓶、不用なる洋袴ボタン一つ一つに對して正確なる證明書が交附されるのである。即ち嚴密に「正確な」計算それに従へば有ゆる要求が満たされて、而して決済が正しく行はれるところの計算書、それを吾々に示す

べきロオドベルトスの恐慌病に對する治療法なのである。

さて最後に吾々はロオドベルトスが他の無數の勞働貨幣交換經濟の主張者とは違つた眞に新しいことを云つてゐる一點に到達した。と云ふのは是等の人々はグレエからブルトンに至るまで皆資本に依る賃銀勞働の搾取を撤廢する目的の爲めに此交換制度を要求して居る。各生産者をして其生産物の勞働價值全額を收得せしめよう云ふのである。ところがロオドベルトスは決してさうでない云ふ。賃銀勞働と其搾取は依然として繼續するのである

第一に勞働者は如何なる社會に於ても其生産物の全價值を收得して消費し得るものではない。常に生産せられた基金の中から、經濟上不生産的ではあるが、併し必要なる幾多の職分を行ふ者を養ふ費用が支辨せられなければならない

のである。それを信じない者はボメラニヤの政府主金庫年金局計算官で、此計算書を檢査して間違なしと認め、間違のないXに申出ればいゝのである。

次にロオドベルトスが其無邪氣にも其ユウトビヤに依て工業上及び商業上の恐慌を防遏しようとする其無邪氣さ加減を見て貰ひ度い。抑も商品生産が世界的市場的範圍で行はれるやうになると、自己の計算に従つて生産を行ふ個々の生産者と、市場との均衡は、世界市場の暴風雨即ち恐慌に依て回復されるのであるから、競争と云ふことが價格の騰落に依て、個々の生産者に世界市場の情況を指示することがなくなれば、個々の生産者は全く目を塞がれたも同様になるのである。生産者をして、復た再び市場の情況を知らしめないやうにすること、これが實にドクトルアイゼンバルトをして羨望措かざらしむ

と云ふ。——併しこれは今日の分業が存続する限りのみ正しい。國民全員が生産的勞働に服する義務ある社會では此事は最早なくなるのである。但し社會的豫備基金及び蓄積基金の必要は依然として存し、従て成程勞働者たる國民は其生産物總量を所有享受するであらうが、各個人が其「全勞働收益」と云ふとはないのである。經濟上不生産的な職分を行ふ者を勞働生産物の中から養ふといふことは他の勞働貨幣ユトピストも之を看過しはしなかつたが、たゞ彼等は勞働者をして普通の民主的方法で此目的の爲に自ら己れに義務を課せしめたのに、ロオドベルトスは全問題の決定を官僚政治の裁量に委し、上から勞働者の己れの生産物に對する得分を定めて之を恩惠的に收得せしめたのである。

第二にロオドベルトスは地代及び利潤をも削減せず其儘に存続せしめようとする。蓋し地主

及び工業資本家も經濟的には不生産的でも社會的には有用若しくは必要なる或職分を行ふものであつて、云はゞそれに對する俸給として地代及び利潤を收めるものであるから云ふ。一體今日彼等はその行ふ(而かも充分悪しく行ふ)僅かの職分に對して餘りに多くを收得して居るのであるが、ロオドベルトスは少くも今後猶ほ五百年間は特權階級のあることを必要とし、現在の餘剩價值率も依然として存續すべきもので、たい今日以上に増進してはならぬと云ふ。此の餘剩價值率をロオドベルトスは二〇〇%と認めて居る。即ち一日十二時間労働の場合に労働者は十二時間の證明券を得ないで、僅かに四時間の證明券を交附せられ、而して自餘の八時間内に生産せられた價值は地主と資本家との間に分配せられるのである。即ロオドベルトス式の労働證明は正面から嘘を吐いてゐるのであ

る。これで労働者が甘じてゐるだらうと思ふのはボメラニヤの地主でなければ想像の出来ぬ事である。が、彼れは労働者が十二時間働さながら實は四時間しか働かなかつたのだと云はれて音なしに承知してさへ居れば、その代りには今後永久労働者の彼自身の生産物に對する配當分が三分一以下には下らぬことを保證しようと思ふのである。かうなつては最早これに一言を費やす値打ちもない。即ち労働貨幣のユウトビヤに於て、ロオドベルトスが新しいことを述べてゐるところでは、此の新しきものは兒戯に類するもので、彼れ以前及び彼れ以後の幾多の同意見者の業作の遙かに下風に立つものである。ロオドベルトスの Zur Erkenntnis が出た頃の時代に取つてはそれは慥かに重要な一著作であつた。彼れのリョルドの價值理論の或方向への擴充は前途の見込みの多い發達であつた。此

擴充が新しかつたのは彼自身と獨逸とに取つてのみであつたとしても、猶ほそれは大體に於て彼れの優れたる英吉利の先人の業作と比肩し得るものであつた。たゞ併し、それは一個の發達たるに過ぎなかつた。理論に取つての眞の所得を收めようとするには、それから進んで猶ほ根本的批評的な研究を續けなければならぬのであつたが、ロオドベルトスは始めからリカルドの擴充をユウトビヤへの方向に於て行つたから進歩の途は彼自ら之を遮斷したのである。而して之れに依て彼れは沒成心なる批評の第一要義を失つて仕舞つたのである。彼れは豫め定められたる目的に向つて突進した。傾向的經濟學者となつたのである。一度彼のユウトビヤに捉へられたので、彼れは自ら學問上に於ける進歩を全く不可能のものにしたのである。一八四二年から其死に至る迄、彼れは一つの處を輪をなし

て廻轉し其第一作で既に言明したか或は暗示したところの思想を常に繰返しては誤解せられたと感ぜられるものもないのに剽竊されたと感じ、而して最後には根本に於て彼れは既に久しく發見せられてあつた事を再び發見したに過ぎぬと云ふことを認めることを肯んじないのである。(完)

自然的課税の主張者(二)

金原賢之助

四 パトリック・エドワード・ドオフ 一八一五—一八七三年

Patrick Edward Dove は一八一五年七月三日日蘇格蘭 Edinburgh に近き Lasswade に生れた。彼は古い著名な蘇格蘭の名門の出であつた。